ロルカ詩祭

2019年
8月17日(土)

第22回

《朗読者》

(1) 安西佐有理 (2) 大西隆志
(3) 大橋愛由等 (4) 岡本清周
(5) 金里博 (6) 黒田ナオ (7) 今野和代 (8) 白河直人 (9) 情野千里 (10) 千田草介 (11) 高木敏克 (12) 高谷和幸
(13) 田村周平 (14) 中嶋康雄 (15) 中永公子 (16) にしもとめぐみ (17) 秦ひろこ (18) 福田知子 (19) 法橋太郎

演奏／ジャズピアニスト
田中ケイコ

歌え踊れそれだけでいい

〈詩祭スケジュール〉

8月17日(土)午後5時　開場
［1部］PM5:30〜PM6:00
ロルカ詩の朗読
［2部］PM6:15〜PM8:30
詩人たちの自作詩朗読

《場所》スペイン料理カルメン(神戸市中央区北長狭通1・7・1 電話078・331・2228〒650-0012)
JR・阪急・阪神・地下鉄「三宮駅」から徒歩三分。
《料金》A:3600円(チャージ込み)(1)夏の特選スープ(2)季節のサラダ(3)メインディッシュ(4)パエリア(5)コーヒー(6)デザート
B:2000円(チャージ込み)(1)ワンドリンク(選択可)(2)タパス
《特典》当日参加者の方全員に、第二部参加の詩人たちが朗読する詩作品掲載の『八月一九日詩集22巻を進呈します。

みな来て　アンダルシアの風になれ

高木敏克

グラナダの近郊の小さな町の不思議な光景であった。
砂ぼこりのたつ小道を一台の小型トラックがやってきた。ピックアップの荷台には何かが乗っているはずだがよく見えない。不思議なことにそのあとを影のようについてくる小さな動物が見えてきた。近づくと二匹の子羊だった。首を長くのばしながら白いやわらかい毛の幼い兄弟の羊であった。目の前にトラックが停まると荷台の荷物はバラのように輝いて見えた。それは市場の裏の肉屋の勝手口だった。腕の太い肉屋の親父が出てきてひょいと肩に担ぐとそれはバラ色の羊の胴体であった。おさな子は鼻を鳴らしながら闇の底までそれを追いかけていく。
熱い太陽が降り注いでいた。眩暈のする光景であった。影は黒く壁は白く赤は深い色であった。だが光景に深い意味はなかった。その光景の意味は単純なのだ。
仔羊は殺された母親の乳の匂いを追って市場の肉屋までやってきたのだ。
悲しい鳴き声であった。涙にゆがむ光景であった。
すると、青空を引き裂きながらロルカの詩が降ってきた。真っ黒な死がバラ色を引き裂いてやってきた。

わたしがどんなにお前を愛しているか、お前には決してわからないであろう
なぜならお前はわたしの中で眠り、そして眠っているからだ
鋭い刃の一つの声に　追い立てられ
泣いているお前を　わたしは隠している

肉体と輝く星とを等しく揺り動かす基準が
すでにもう　わたしのずきずき痛む胸を刺しぬいて胸を刺し貫いている
そして、濁った言葉が　お前の厳しい精神の翼たちを　侵してしまった

人々の群れが庭の中で跳んでいる
お前の身体と　わたしの末期の苦悶を期待して
光と　緑のたてがみとの馬に乗り

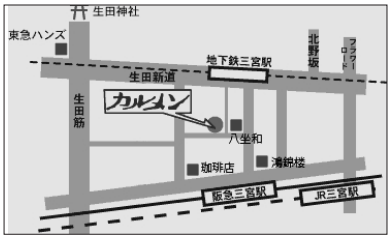
だが　眠り続けるがいい　わたしの生命よ
ヴィオリンの中の　わたしの壊れた血を聞くがいい！
見よ　わたしたちはまたつけ狙われている

恋人が詩人の胸の中で眠っている（ガルシーア・ロルカ）

羊たちに与えられて偽物の自由が肉と共に殺される時
死という不自由に世界は凍りついた。
わたしがスペインを訪れたのはこの時まだフランコ政権のときであった
死のにおいがまだいたるところに残っていた。
出発点のバルセロナのランブラス通りには戦車と装甲車が無数の蝸牛になって這っていた。
それでも闇は解けそうに見えた。
（わたしはそこで小説「溶ける闇」を書いた）

あの時のわたしも仔羊であり、ロルカは母羊のように悲しい存在であった。
すべての恋歌は、死者にささげられるものだと思えた。
気が付くとわたしはグラナダの町をさまよっていた。見上げると高い建物の大きなテラスの上から数人の少女がわたしをながめていた。それは見下ろすわけでもなく、風のように柔らかな視線であった。グラナダでは人々の視線は風のようにやわらかに感じられた。
道行く人々は海鳥のように立ち止まり、盲目のくじ売りの声がどこまでも響いていた。
くじ売りは杖を鳴らし「誰かわたしを道の反対側に連れていってくれ」と、地団駄の泣きを入れてくる。だれかれとなく、老いたくじ売りの手を引いて、一瞬の巡礼を感じるのだった。

ロルカ詩祭会場　スペイン料理 **カルメン**



☎078-331-2228
神戸市中央区北長狭通
1-7-1カルメンビル2F
阪急「三宮駅」西口下車
北へ徒歩1分